

Arnold J. Bauer,

*Goods, Power, History:
Latin America's Material
Culture.*

Cambridge: Cambridge University Press,
2001, xx+245pp.

さとう じゆん
佐藤 純

I

本書は、現在カリフォルニア大学デイヴィス校歴史学部教授のA・パウアーが、これまで共著や雑誌等で発表してきた論文に新たな稿を加えて纏めたものである。本書では、タイトルが示すように、ラテンアメリカの社会、文化が特に外国からもたらされるモノの影響により、いかにして形成され発展してきたのかが考察されている。

さて、我々はなぜモノを獲得しようとするのであろうか。生まれ出たその日から我々はモノを消費することを運命付けられている。著者はこのあたりまえの問いから本書の叙述をはじめ、モノが我々にとっていかなる意味を持つのかを考察する。我々が獲得するモノは大きく分けて3つの役割を果たしている。まず言うまでもなく、生活に対する必需品としての役割である。次に、ある特定のモノを消費、所有する人々に、顕示性、アイデンティティを与える役割である。そして第3に、モノは壮大な宗教儀式や公共の場での誇示的行事等に対して物質的基礎を与えることにより、個人やコミュニティ、または階層間の社会的関係、序列を明確にし、さらにそれらを維持する役割を果たす。この意味でモノは必要性だけでなく社会的意味を持っており、さまざまな民族集団、国家、文化圏による特定のモノの生産、獲得、所有は、独自の社会、文化を形成、維持するの

である。

著者は社会的意味を持つモノに焦点を据え、先コロンブス時代のアンデス、中央アメリカ地域において形成された物質文化、コロンブスの新大陸「発見」によるこれら文化圏におけるモノとイベリア文化圏のモノとの接触、スペイン植民地期ラテンアメリカの物質文化の形成と発展、そして国民国家形成期、輸入代替工業化期、ネオ・リベラル期ラテンアメリカの物質文化について順次検討していく。以下で、まず本書の構成と内容を検討したい。

II

本章の構成は以下のとおりである。

第1章 序論

第2章 先コロンブス期アメリカのモノの分布

第3章 接触するモノ

第4章 文明化を促すモノ

第5章 近代化を促すモノ——リベラリズムの絶頂期における物質文化——

第6章 開発を促すモノ

第7章 グローバル時代のモノ——リベラリズムの再来——

第1章の序論で著者は、「力」(power)という本書全体を通してキーとなる用語について定義している。著者によると、「力」とは以下のようなものである。すなわち、王や国家による公序良俗を維持するために発せられる勅令や法律、税・関税、知識の独占や資本の削き出しの力、そして各時代の先進地域や国におけるエリート層の生活様式、文化が、後進地域に及ぼす影響力である。パウアーは先進地域や国におけるエリート層を「外国の準拠集団」(reference group)と呼んでおり、特にラテンアメリカにおいてはこの「外国の準拠集団」の影響力が大きかったとしている。パウアーはこれらの「力」がラテンアメリカの衣食住の様式をいかに変化させ、最終的には各時代固有の社会、文化を形成していったのかを、以下の章で時代順に詳細に検討している。

まず第2章では、先コロンブス期の中央アメリカ地域とアンデス地域をそれぞれ代表するアステカ文明とインカ文明について叙述されている。著者によると、アステカ、インカ両帝国ともに膨大な人口と広大な領土を維持していたが、それを維持するシステムには著しい相違があった。すなわち、アステカは政治的強制をもってモノを一挙に王の下に集積し、さらに余剰を市場で販売することによって富を集積したが、インカは賦役労働によりモノを生み出させ、それを得ることにより富を集積した。このように王がモノを徴収するシステムには根本的な相違があったが、両帝国においてモノが果たした役割は共通していた。まず、征服、併合等により得た新しい部族や領土からもたらされる「異国風なモノ」(exotic imports)について述べられているが、アステカは帝国南東部の新領土の獲得により、カカオ、木綿、熱帯に生息する鳥獣の羽毛を、インカは拡大する植民地からココア、綿織物、希少な貝殻などを得、これらは「異国風なモノ」として帝国のエリート層により所有され身につけられた。王やエリート層はこれらのモノの豊かさを儀式等で定期的に誇示すると同時に、食料を飢饉の時に限らず日常的に人々に施すことにより、圧倒的なモノの豊かさを誇示した。このようにして、モノは帝国のヒエラルキーを維持する役割を果たしたのである。

第3章では、1492年のコロンブスによる新大陸の「発見」と、その後のスペイン人によるアステカ、インカ両帝国の征服によるスペイン植民地成立直後の混乱期について叙述されている。軍勢力とキリスト教を両輪とするスペイン帝国主義は、アステカ、インカ両帝国下で形成された社会のヒエラルキーを崩壊させ、インディオばかりでなく征服者達にもアイデンティティの混乱をもたらした。インディオにとって、キリスト教は衣食住の変化を強制するものに他ならない。まず、彼らの主食であるジャガイモやトウモロコシは、キリストの食べ物であるパンに対して不浄なものとして、パンの主食化と小麦の栽培が促された。また日常生活は7日ごとに区切られ、1週間に一度キリスト教徒にふさわしい格好で教会へ行くことが強制された。さらに、インディオの集

落は格子状に区切られ、イベリア風の町へと取って代えられた。著者はこの章で、スペイン人の到来によるインディオの日常生活の急速な変化について、図や写真を多数用いて描いている。

同時に、征服者の側にとってもアイデンティティの混乱が漸次的に生じつつあった。インディオに対するキリスト教の普及とインディオの生活の改善、つまり植民地社会のイベリア化が進行すればするほど、イベリア半島出身の彼らとインディオとの区別が曖昧になった。アルジェリア人社会におけるフランス人のように、肌の色などで外見的にインディオと明確に区別されえない彼らは、アイデンティティの危機に直面することとなった。このアイデンティティの危機は、イベリア半島人とインディオの混血が進むにつれ、つまりクリオーリョの第1世代、第2世代が誕生していくにつれ深刻になっていく。著者が章の最後で述べているように、この時期の植民地社会は突然のモノと人種の氾濫により混沌とした様相を呈していた。

しかし、副王体制の成熟と歩調を合わせて、この混沌とした社会状況はモノの「力」により徐々に秩序付けられていく。第4章では、食料、衣服、住居を通して支配エリート層と一般民衆との区別がなされていく様が描かれている。それぞれについて著者は図や写真を用いて詳細に検討しているが、紙幅の都合上ここで逐一触れることは避けたい。ペニンスラール、クリオーリョ、メスティソ、ムラート、インディオなどのさまざまな民族集団が入り乱れた植民地社会において、最も明確にステータスを誇示する手段は、ある特定のモノを消費し、所有し、そして顕示することであった。ステータスを示すゲージは、インディオが消費、所有しているモノを一方の極とし、ペニンスラールがイベリア半島から持ち込んできたモノを他方の極とした。つまりラテンアメリカにおいては、イベリア半島産のモノを消費、所有し、そして顕示しうることは、民族の区別を問わずエリート層に属することを意味したのである。それゆえ、よりよいステータスを保証するイベリア半島やその他ヨーロッパ諸国のモノを獲得しようとする欲求は最下層にまで及び、それが結果として当該

期ラテンアメリカの急速な文明化をもたらした。従って著者はこれらヨーロッパからもたらされたモノを、「文明化を促すモノ」(civilizing goods)と呼んでいる。

第5章では、クリオーリョによりスペイン帝国からの独立が達成され、近代的国民国家が形成されていく19世紀初頭から20世紀第1・四半期までの時期が扱われている。同時期においては、ヨーロッパからもたらされるモノは、社会的ヒエラルキーを形成するうえでさらに大きな役割を演じた。しかし、著者が「近代化を促すモノ」(modernizing goods)と呼んでいるモノとは、以前のようにイベリア半島からもたらされるモノではなく、当時の文明の最先端をいくフランスやイギリスのモノであった。クリオーリョはスペインからの独立を目指すにあたり、ペニンスラールと明確に区別され得るアイデンティティを必要としていた。それゆえクリオーリョは、イベリア文化そのものを後進的かつ権威主義的なものとし、イギリスやフランス製のモノを先進的で自由なイメージで捉え、それらを消費、所有し、そして顕示したのであった。同時に独立後の国家においても、それら「近代化を促すモノ」を顕示しうるのはエリート層の証とされ、下層階級にいたるまでフランスやイギリス製のモノを渴望したのである。その表れの典型として本書では、赤道直下の真夏のリオで黒ずくめのタキシードを着こみ、イギリス紳士を気取る一市民の写真が掲載されている。

第5章は輸入代替工業化期を、そして第6章ではネオリベラリズム期のラテンアメリカについて検討されているが、この部分は本書をまとめるために著者が新しく書き下ろしたものである。検討にはもっぱら二次文献と写真を使用しており、しかも従来の研究の域を出るところはないため新味に欠ける。また、第6章の議論は「外国の準拠集団」という著者自身が本書を通じて一貫させようとしている概念の適用に成功しているとは言えず、低価格、低コストを武器としたコカ・コーラやマクドナルド商品の氾濫というお決まりの現代物質文明批判に終わっている。しかし、第5章においては、輸入代替工業化期ラテンアメリカのいわゆる「内向きの発展」

(crecer hacia adentro) 政策を、「外国の準拠集団」に対する消費ナショナリズムと捉え、「国民の食事」(cocina nacional)の創造という興味深い議論がなされている。

III

最後に、評者が感じた本書の意義と限界について述べ、本書評を締めくくりたい。本書の意義は多々あろうが、以下の2点に要約されよう。第1に経済史研究に対する貢献である。これまで、ラテンアメリカ経済史を専門とする研究者のみならず、途上国経済の研究者は総じて輸出経済にのみ注目し、輸入経済については補足的に扱ってきたに過ぎなかった。しかし、著者は輸入経済に注目することにより、社会、文化領域をも取り扱う新しい経済史の方法論を提示した。第2に、ひとつのパースペクティブで枝葉末節にこだわらず500年以上にもわたる時期と、ラテンアメリカという広大な地域を検討しきったことにより、学術書であるにもかかわらず幅広い読者層に対して強いメッセージを発することに成功している点である。本書読了後、著者が冒頭で述べている「モノを手にする時、そのモノを作っている人々(農夫や職人)の姿を想像して欲しい」という言葉は、国籍不明の大量なモノが氾濫する現代に生きる我々の心に強く訴えかけるものがある。

しかし、いくらかの限界も指摘されうる。第1に「ラテンアメリカの物質文化」という副題であるにもかかわらず、第4章以降、本書で検討対象となっているのはもっぱらメキシコとチリであり、コノスール(南アメリカ南部地域)についての叙述は著しく少なく、ブラジルについてはほとんど全く検討されていない^(註1)。本書のタイトルとバランスを考えれば、二次文献を用いても検討すべきであっただろう。

このような構成上の問題の他にも、著者の議論の核心に触れる問題点もある。本書ではヴェブレンの顕示的消費(conspicuous consumption)という概念[Veblen 1899 参照]をラテンアメリカにあてはめ、実証しようと試みられているが、果たして

この概念だけでラテンアメリカの物質文化について議論できるのであろうか。著者は、ヴェブレンの概念を応用し、ラテンアメリカの社会、文化においては、下層階級→中流階級→エリート階級→「外国の準拠集団」という準拠図式が成り立つとしている(注2)。確かに「外国の準拠集団」がラテンアメリカのエリート層の文化をかなりの程度規定したことは事実であるが、果たして一般大衆の文化まで規定しえたのであろうか。特に著者が「外国の準拠集団」の影響が最も強かったと論じている19世紀末葉から20世紀初頭の時期にかかわることであるが、確かに、上述の準拠図式に従って外国からもたらされたエリート層の影響が、増大しつつあった都市中産階級にまで及んでいたことは事実である。例を挙げると、この時期イギリスの大手デパートであるハロッズ(Harrods)の支店網がアルゼンチン、ブラジルに構築されたが、これはエリート層の需要というよりも、都市中産階級、さらには大衆の需要に応えたものであった。

しかし一方で、エリート層の文化とは異なる土着の文化が歴史を通して存在していたことも事実である。中米、アンデス地域におけるインディオ文化やコノスールにおける gaucho 文化等である。パウアーは本書で、特に国民国家形成期以降エリート文化がいかにしてこれらの文化を排除していったのかを論じているが、検討対象は都市部に限定されている。論旨の一貫性を保つために意図的に地方の検討を排除しているのであろうが、この時期のラテンアメリカにおける地方の生活や文化に対する検討が必要であるように思われる。なぜなら、まさにエリート文化が開花したとされる19世紀末葉から地方の土着文化への見直しがなされ、20世紀に入ると大衆の支持を必要とするポピュリスト政権が、これらの地方の土着文化を国策として全国民に強制していくからである。パウアーはヴェブレンの概念を用いることにより、500年にも及ぶ長期の歴史を論理的に一貫して叙述することに成功しているが、ラテンアメリカの物質文化を論じるうえで検討されるべき重要な対

象を排除している。評者が専門とする近現代アルゼンチンの現地における近年の研究動向は、すでにパウアーのような都市部のエリート文化に注目した研究から、地方の土着文化についての一次史料を用いた個別具体的研究にシフトしている。今後ラテンアメリカの物質文化について研究していくうえで必要とされているのは、これら現地の研究成果を踏まえ、エリート文化による土着文化の「排除」の側面よりも、「相互関係」あるいは「融合」の側面に注目することであるように思われる。

(注1) ブラジルのエリート文化の形成については、Needell (1987) の研究がある。

(注2) 著者と彼の同僚である人類学者の教授 Benjamin Orlove 等との共著を参照 [Orlove 1997]。共著のタイトルが示すように、「外国(商品)の魅力」(the allure of the foreign) がいかにしてラテンアメリカの社会・文化を形成したのかを実証している。同共著は、経済史研究に社会、文化の考察をも包摂する概念、方法論を提示しえたという点で画期的であり、今回書評を行った本書でキーとなる「外国の準拠集団」という語もこの共著から生まれた。

文献リスト

- Needell, Jeffrey 1987. *A Tropical Belle Epoque: Elite Culture and Society in Turn-of-Century Rio de Janeiro*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Orlove, Benjamin ed. 1997. *The Allure of the Foreign: Imported Goods in Postcolonial Latin America*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Veblen, Thorstein 1899. *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*. New York: Macmillan.

(東北大学大学院文学研究科博士課程)